教授に就任して

教授に就任して

新潟大学大学院医歯学総合研究科
包括歯科補綴学分野　堀　　一　浩

このたび、2023年12月１日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野教授を拝命致しました、堀　一浩と申します。

私は、1998年に大阪大学歯学部を卒業後、大阪大学歯科補綴学第二講座に入局いたしました。野首孝祠名誉教授、前田芳信名誉教授に師事し、有床義歯治療を中心に臨床研究教育を行ってまいりました。特に、小野高裕名誉教授には入局当時より顎顔面補綴治療を教えていただき、咀嚼嚥下時における舌と口蓋との接触圧（舌圧）計測をテーマに学位をご指導いただきました。2009年には新潟大学へと赴任し、井上誠教授のもと摂食嚥下リハビリテーション学分野に携わりました。その後、2015年に小野高裕名誉教授が包括歯科補綴学分野教授に着任されたのを機に、再度補綴学分野へと移籍して現在に至っております。

包括歯科補綴学分野では、有床義歯補綴学や顎口腔機能学を担当しています。食事や会話の機能が低下する原因は、歯を失うことだけではありません。舌や唇などの口の中の器官の形態や動きが大きく影響します。そのため、口の中の形態や機能、感覚を包括的に評価診断し、対応を検討する必要があります。我々は、加齢、要介護、外科的切除や脳血管疾患などの理由により歯を失った患者や機能が低下した患者に対して義歯治療やリハビリテーションを通して機能改善をはかることを目標としています。新潟大学で歯科補綴学だけでなく、摂食嚥下リハビリテーションを専門とする経験を得たことは、私にとって包括的な補綴治療のための幅広い視点を与えていただいたものと考えています。

このような観点から、研究においても口腔機能評価を中心として様々な手法を提案して参りました。大学院時代からの研究テーマであった機能時の舌運動の測定では、Swallow scanという専用の薄型のシートを開発し、様々な疾患における舌圧発現の特徴や、物性が異なった際の舌圧の変調を明らかにしてきました。最近では舌運動を３Ｄモーションキャプチャーすることにより、詳細な舌動態を分析しています。また、グミゼリーを用いた咀嚼能率評価法について、スマートフォンを用いて画像解析できるようなアプリケーションを製作しました。さらに、普段の食事で使えるウェアラブル型の咀嚼回数計や、スマートフォンを用いた舌苔画像評価など、近年の技術革新に応じた開発を行い、これらを用いた研究を行っています。今後は、これらの技術を幅広く使っていただけるように普及させる必要があると考えております。

現在当分野には25名が教室員として在籍し、日々臨床教育研究に頑張ってくれています。50年を超える当分野の歴史を引き継ぎ、新たな技術を分野の垣根なく融合させながら、歯科補綴を通じて国民の皆様の口腔の健康に寄与したいと考えています。新潟大学歯学部の先生方には様々な面でご指導いただき感謝の念に堪えません。浅学の身ではありますが、歯科補綴学の発展に貢献できるように今後も一層精進してまいる所存でございます。引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますよう、今後ともよろしくお願いいたします。

教授に就任して～教育・研究についての抱負

口腔生命福祉学講座 口腔保健学分野
吉 羽 永 子

2030年に向けた新潟大学将来ビジョンでは、「未来のライフ・イノベーションのフロントランナー」になることを掲げております。これを受け、新潟大学歯学部では、「健口長寿社会への貢献」、「人材養成機能の強化」、そして「強みのある研究推進」を３つの柱として挙げております。私はこの３つの柱の推進のために、口腔保健学分野の立場から下記の様に取り組みたいと考えております。

歯科医師歴約30年の間、教育では実習を中心に担当してまいりました。臨床実習を含め週２～３日は学生実習に注力し、口腔生命福祉学科の教育では、第一期生から現在に至るまで担当し、早いもので20年が経ちました。臨床実習の現場で学生さんと一緒に学んできたことは、「歯科医療は、口腔ケアを介して、自立した高齢者の育成に直接関わっている」という事実です。「国民皆歯科検診」制度の検討が始まっており、義務化の目的は主に、国民の健康長寿を伸ばすことにあります。そのためには、若い時からの予防の指導と、その後の豊かな食生活に基づく自立した老後へと繋げる必要があります。チームプレーが重視される医療の現場では、歯科医師・歯科衛生士どちらの力量も上げることで良い医療の提供が可能になります。社会で信頼され活躍できる歯科衛生士・社会福祉士の育成に携わることは、口腔生命福祉学科のある新潟大学歯学部における全教員の責務であると捉えてまいりました。今後、新潟大学歯学部口腔生命福祉学科の輩出する「ダブルライセンス」の活躍の場は今まで以上に重要になります。そういった意味でも、歯学部の皆様のお力添えが必要となります。今後とも、それぞれの現場でのご指導のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

研究では、2021年に文科省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業」に採択されて以来、歯学部６Ｆにある研究センターで研究をしております。ここでは、海外で素晴らしい業績を積まれ帰国後もactiveすぎるほどに研究を続けていらっしゃる先生方が指導されているせいか、海外からの大学院留学生も非常に優秀です。加えて、学内の日本人大学院生の皆さんも出入りされる様になりました。「99%の苦しい研究を耐えることができるのは、１%のワクワク感を共有できる仲間がいる」からこそで、そういう視点からも人材の育成に貢献できればと考えております。

新潟大学歯学部歯学科の学生さんの約半数は女性であり、口腔生命福祉学科に至ってはほぼ100%が女性です。こういった状況を見ましても、ライフイベントと仕事の両立は当然のことながら、「研究力」「教育力」「診療力」および「運営力」を伸ばし、上位職を目指す女性を支援する環境（体制）作りも必要かと考えております。